



単元の導入で中核教材の論の展開方法を取り入れたモデル文を提示した。中核教材の学習では図1に示すような用語や認識方法を用いて筆者の意図や論の展開の工夫を読み取った。三次の発展学習では、中核教材の学習を生かして説明文を書くという活動を位置付けた。単元全体を通して、同じ文章構成や用語、認識方法を用いることにより学習者は、説明文について理解を深めた。

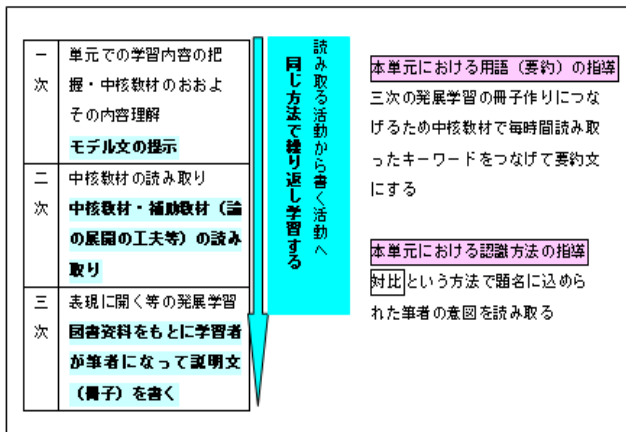
図2は学習者が書いた作品である。認識方法の学習を生かして順序に気をつけた文章を考え、適切な接続語や文末表現で表されている。

検証授業1ではまだ説明文を書くことに難しさを感じる学習者がいたので、検証授業2では中核教材の読み取りから書く活動へとスムーズに行うためのさらなる手立てを行う。

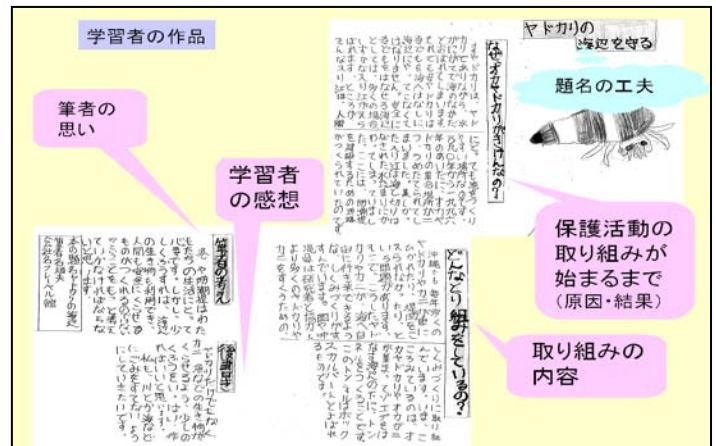
## ② 検証授業2（所属校4年生 16時間）の概要

単元名 かんきょう問題を全校に発信しよう 中核教材 「ウミガメのはまを守る」

(図3)

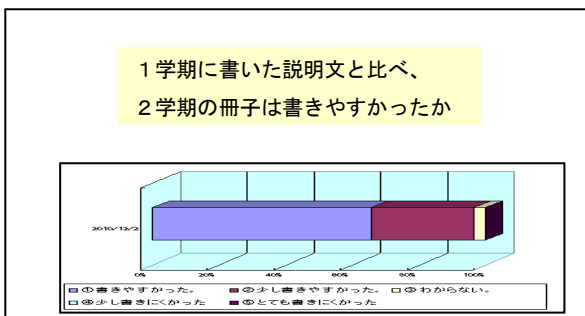


(図4)



検証授業1の課題を受けて、図3のように発展学習をより意識した中核教材の指導を工夫した。題名に込められた筆者の意図を、「対比」という認識方法で読み取った。本単元の中核教材は、環境問題に対して保護活動が始まった経緯が原因と結果の繰り返しによって書かれていることと、保護活動が5W1Hをキーワードにして書かれているという特性がある。その特性に着目させることによって論の展開方法に気付かせた。そして、毎時間読み取ったキーワードをつかって要約文を書く活動を設定し、発展学習で説明を書く手立てとした。図4は学習者が発展学習で書いた説明文である。図書資料から書きたいことを引用したり要約したりし、中核教材で学習した文章構成に沿って書いている。あとがきには、自分の考えを書いている。検証授業2の後のアンケートでは、「説明文の学習に自信がついた」という学習者が検証授業1の後より増えた。また、図5から分かるように、発展学習につながる要約する活動を中核教材の学習で、毎時間設定したことにより1学期より説明文が書きやすかったという学習者が多かった。

(図5)



## 5 研究のまとめ

- (1) 教材の特性を生かして説明文を書くために、単元の中で同じ用語や認識方法での学び方を繰り返し学習することで、書き方が分かる。分かった書き方を活用して表現する（説明文を書く）ことが、さらに学習者に学びの実感をもたらすことにつながる。
- (2) 適切な言葉で表現できるようになるには、自分自身の伝えたい内容に合った言葉を選び出す活動を単元の中に設定し、書く活動の機会を多くする必要がある。

## 6 今後の課題

- (1) 必然性のある課題作りや学習者が主体的に読みたくなる書きたくなるような単元構想の工夫をする。
- (2) 書く活動へのさらなる手立てを工夫する。

## 7 おわりに

国語科の力とはどのようなことをさすのか、その力をどのようにつけるのか、どのような状態になれば力がついたといえるのか。学習指導要領により指導事項が明記されていても、国語科における指導には常にあいまいさがつきまとう。本研究は学習事項を表現活動において使いこなすことを目標に、あいまいさを払拭する一つの試みでもあった。今後も本研究を土台として、学習者の実態に即して学びの実感がもてる国語科の学習を実践していきたい。

